

福島の子ども保養プロジェクト

福島では、東京電力福島第一原子力発電所の事故により、いまだなお、多くの人が県外での避難生活を送り、また、県内で暮らしている人の多くも、被ばく積算量を心配しながら不安な日々を送っています。

そんな中、こどもの健康被害の不安を抱えながら暮らす保護者のニーズを把握し、支援することを目的とした「福島の子ども保養プロジェクト」が立ち上がりました。このプロジェクトは、福島県生活協同組合連合会と福島大学災害復興研究所が主催し、日本生活協同組合連合会と公益財団法人日本ユニセフ協会後援で行なわれています。日本生協連では、「つながろうCO・OPアクションくらし応援募金」を立ち上げ、全国の生協に募金への協力を呼びかけており、そこで集まった募金から、このプロジェクトへの資金支援を行なっています。また、ユニセフでは、40万円の募金や、フィンランドからおもちゃを取り寄せ贈るなど、このプロジェクト開催のために、両団体がサポートをしてきました。

第1回目のプロジェクトは、12月10～11日にかけて、南会津の「花木の宿」で行なわれ、12月17～18日が、その第2回目の実施でした。第2回目は、「磐梯高原リゾート・インぼなり」(福島県耶麻郡)において行なわれ、温かい温泉につかりながら、25組79人の親子がゆったりとした時間を過ごしました。

17日は、13時に福島駅と郡山駅それぞれから、宿泊施設の送迎バスに乗り、宿に向けて出発しました。宿に向かっていると、外がどんどん雪景色に変わっていきます。到着すると宿の人に出迎えられ、ほっと一息ついたあとは、大広間に集まって、学習会が行なわれました。広間の後方のスペースには、子どもが思いっきり遊べるように、おもちゃやお絵かきセット、ボールなどがたくさん置いてあります。子どもたちは、会場を所狭しと走り回っていました。そんな中、広間前方では、学習会がスタートし、個人被ばく線量計の使用方法についての説明や、希望者には、食と免疫力に関するセミナーが行なわれました。

個人被ばく線量計は、外部被ばくに対する防護や長期的な健康管理につながることを願い、希望者には1週間の貸し出しも行なわれました。この被ばく線量計は、ならコープからの寄贈品で、20台贈られたそうです。多くの方が、線量計の貸し出しを希望していました。借りた人は、行動記録ノートに、行動の内容と範囲を記録し、それを福島県生協連に提出。その結果を元に、保養の効果の検証を行なうとのことでした。



貸し出された線量計をつけて、にっこり。

福島市南矢野目町にお住まいの斎藤香穂利さんは、1歳8ヶ月の息子さんと参加しました。斎藤さんも、線量計を借りたうちの1人です。家が河原の近くにあるといい、放射線

量は気になるといいます。

「家の窓から見るとところに公園があるのですが、長い間、遊ばせてあげることができません。遊びたがるので、出ちゃだめ、と言うのがつらいです」と話していました。

伊達市にお住まいの野村のぞみさんは、お連れ合いと3歳の娘さんと参加されました。娘さんが通っている保育園は、原発事故以来、一度も外で園児を遊ばせたことがないそうです。野村さんも、線量計を借りていました。このプロジェクトについて、「放射線は、免疫力にも影響するといいます。線量が低いところに行けるだけで、本当にありがたいです」と話していました。

他にも、温泉に3回もつかりましたと話すお母さんや、子どもたちも、雪が降る寒い中、「こんなに雪をたくさん見たの久しぶり!」と、靴をぐちょぐちょにぬらしながらサッカーをしたり、雪合戦をしたり、顔から雪に飛び込んでみたりと楽しんでいる様子でした。



普段思う存分外で遊べない福島の子供たち。
うれしくて、雪に顔からダイブ!

このプロジェクトは、福島大学の西崎伸子(にしざき・のぶこ)准教授が、福島の子どもたちを安全な場所で遊ばせようと鴨川にて保養企画を計画

したところから始まりました。別の会議で一緒だった福島県生協連の佐藤一夫専務理事が、西崎准教授のプロジェクトに賛同し、一緒に進めることになったといいます。

このプロジェクトは、1月7日より、0~5歳の子どもと、その親を対象に、毎週末保養プロジェクトを実施し、現在、100回の実施を目指しているそうです。12月中は、モニター企画ということで、小学生の子どもも含め募集をかけました。この企画は、組合員以外の参加も可能なため、お母さん同士の口コミで、多くの応募があり、抽選まで行なわれたそうです。

このプロジェクトは、2つのコースが用意されており、1つ目が乳幼児対象の「ゆったり保養コース」、2つ目が小学生も参加可能な「スポットコース」です。「ゆったり保養コース」では、毎週末に継続して行なわれる保養企画で、「スポットコース」は、スキーやディズニーランドといった観光スポットに行ったりと、単発企画として行なわれるものです。スポットコース企画について、福島大学の西崎准教授は、「最近福島の情報報道も少なくなり、実態が分からなくなってきました。このように外に出るような企画のときは、積極的に外に福島の現状について情報を発信していくことも大切です」と話していました。

福島県生協連の佐藤一夫専務は、「独自の企画ではなく、他団体も含め、広がりのある企画にしていきたいです。組合員のレベルでつながっていけるような企画になるとよいです」と全国的な取り組みとして、プロジェクトを進めていく決意を述べていました。

帰りのバスでは、福島県生協連のスタッフが、今後の活動に参考になるようにと、参加

者に、今回の企画についての感想を細かく聞いていました。子どもたちは、疲れた様子も見せず、「明日は、ディズニーランドに行きたい!」と元気よく話していました。